

## 古代語の副詞「よく」の「十分に」とされる意味用法について

井 上 博 嗣

### はじめに

本稿は先稿『中古における云わゆる陳述副詞について——「かならず」の場合——』（女子大國文第三百三十八号）に続くものである。中古における副詞「よく」の意味用法を考えることにより、実現の度を量る諸語の意味組織の詳細を明らかにする一石にしようとするものである。対象とした用例は前稿同様中古の和文脈の物語・日記・随筆のほぼ全てにみられる諸例である。

『日本文法通論』森重敏著は、実現の度を極度と量る対称性のものとして、「かならず」「ゆめ心あれ」の「ゆめ」「ゆめゆめ留り給へ穴賢」の「ゆめゆめ」「よく困難にうちかった」の「よく」「きつと」「てつきり」「さだめて」「断然」をあげる。「ゆめ」「ゆめゆめ」「きつと」「てつきり」「さだめて」「断然」は、「かならず」の意味用法を先の拙稿のように、動作・作用の実現の確かさの程度が極度であることを示すと考えると全て「かならず」の意味用法と同系列の諸語と言える。が、「よく」はそれらと同様の意味用法のものとは考えにくい。副詞「よく」の意味を明らかにすることが実現の程度

を量る諸語の組織の今一つの支柱（「かならず」の示す支柱に対して）を示すことになるかに思う。

ところで、「よく」は本来形容詞「よし」の連用形であるが、その「よし」と離して別語扱いする記述が古くからみられる。観智院本類象名義抄は次のように記す。

剋    ハタ 爪 ツトム カツ ヨク セム カナフ キサム カナラス  
子ムロ 爪クル タシカニ チカシ クヒシハル

能    ヨク ヨウス タハタリ

繕    ムシル ツクル ウツス ツクロフ ツル トル シツラフ ツタフ  
ナラス フサム ヨシ シルス トムフ タスク ヨクス

剋の訓みには「ヨク」だけを挙げ、能の訓みには「ヨク・ヨシ」を並置して「ヨク」と記す。繕には「ヨシ」と「ヨクス」を別記する。剋の訓みは動詞系と副詞系「ヨク・カナラス・子ムコロ・タシカニ」と形容詞「チカシ」に分けうる。「ヨク」は「カナラス・子ムコロ・タシカニ」と同一の意味系列のものと意識されてのことと思われる。繕は「直してよくする」と云った意であり、その副詞化した意味は「十全なさまに」的と言えようか。

日本国語大辞典はその副詞「よく」の意味を次のように記す。

①十分に。念を入れて。また、巧みに。うまく。

②ひどく。非常に。はなはだしく。大変。

③たびたび。ともすれば。しばしば。ちよくちよく。

④困難なことをなし遂げた時、あたりまえでは考えられないような結果を得た時、喜ばしいことにでくわした時などの

古代語の副詞「よく」の「十分に」とされる意味用法について

感嘆・賞賛・喜悅あるいは羨望の氣持を表わす。よくもまあ。本当にまあ。よくぞ。

⑤ (④を否定的な意味でいう) 常識では考えられないような言説が行なわれた時、それに対して非難・輕蔑・憎惡などの氣持を表わす。恥ずかしくもなくまあ。まあぬけぬけと。よくもまあ。

以上五つの意味のうち、②は云わゆる程度副詞としてのもので、③は時の副詞(註)とされ、④・⑤は間投副詞(註)とされるにふさわしいものである。①の意味のうち、巧みに・うまくは形容詞連用形そのものの意味で、日本国語大辞典も形容詞「よい」の意味説明の⑨に上手である・巧みである・うまいを設けている。

問題は残る「十分に・念を入れて」とされる意味である。これらも「十分に」は「十分だ」、「念を入れて」は「念を入れてだ」としての終止形や或いは「十分な」「念を入れての」と云える意味用法が現代語からは考えられるが、その意味用法を「よし」「よき」としてもたない。それは、それらの状態性を表わす現代語の意味としてほぼあることで、結果としてはヒト・モノ・コトの動作・作用の実現がその充實さの程度が極度であることを示していると考ええる。

以下、そのことについて、説明を試みる。

説明は原則として、『対校源氏物語新釈』の本文の用例でもつてする。

#### (一) 動作を示す語句を修飾する場合

・春宮にも斯かる事ども聞召して、「さしあたりたる唯今の事よりも後の世のためしともなるべき事なるを、よく思召しめぐらすべき事なり。人がらよろしとも、ただ人は限りあるを、なほしがおぼし立つ事ならば、かの六條院にこそ親さまに譲り聞えさせ給はめ」となむ、わざとの御せうそこにはあらねど、御氣色あるを、

(若菜上二九三(二))

女三宮の婿選びに悩む朱雀院に、春宮が自らの考えを伝えているところである。

「よく」は、「思召しめぐらす」を修飾している。女三宮の婿の選定にはよくお考えめぐらすとのことで、「よく」の意味は「十分に」とまずは言える。その「十分に」は、「お考えめぐらす」と云う内的動作が「余すところなくしつかり」となされると云った意味であり、「思召しめぐらす」なる動作の充実さの程度が極度なるありようで実現することを示していると言えよう。

・例の惟光は斯かる御忍びありきにおくれねば、さぶらひけり。召寄せて、「ここは故常陸の宮ぞかしな」。「しか侍り」ときこゆ。「此処にありし人は、まだやながむらむ。とぶらふべきを、わざと物せむも所せし。斯かるついでに入りて消息せよ。よく尋ね寄りてを打出でよ。人たがへしてはをこならむ」と宣ふ。

(蓬生二六五)  
(一〇)

源氏が花散里のことを思い出して訪ねていく途中、常陸宮邸を通りかかった時のことである。

「よく」は「尋ね寄り」を修飾している。「人たがへしてはをこならむ」としての「尋ね寄り」は、「十分に」なるありようでなければならぬ。「十分に」と云った意味を「よく」は意味している。その「十分に」は「余すところなくしつかり」と云った意味で、それは「尋ね寄り」なる動作がその充実さの程度が極度なる程度で実現することを示している。

・筑紫人は、三日こもらむと心ざし給へり。右近はさしも思はざりけれど、斯かるついでに、のどかに聞えむとて、こもるべき由大徳呼びていふ。御あかし文など書きたる心ばへなど、さやうの人はくだしくわきまへければ、常の事にて、「例の藤原の瑠璃君といふが御ために奉る。よく祈り申し給へ。その人此頃なむ見奉り出でたる。その願も果たし奉るべし」といふ。

(玉鬘三八〇)  
(十二)

筑紫より上京した玉鬘一行は頼れる人もなく落ちつく所も定めかね初瀬に詣でて行先に思い悩み同じく詣できた右近一行に偶々会うところである。

「よく」は「祈り申し」を修飾している。僧侶に玉鬘の為によく祈ることを希求している。「よく」は「十分に」は今一

つなじまない。祈るべき思いを「余すところなくしつかり」と云ったように祈るのである。そのような意味であることにおいて、「よく」は「祈る」と云う動作がその充実さの程度が極度であることで実現することを示している。

以下の例も同類例と言える。

・まことや、かの惟光があづかりの垣見は、いとよく案内見とりて申す。

(夕顔二二〇  
(四))

・さるべき事はいらへ聞えなどして、恥かしげにしづまりたれば、うちいでにくし。されど、いとよくいひ知らせ給ふ。

(帯木八五  
(四))

・中納言の君はいとよく推し量り聞え給へば、……

(宿木二七九  
(三))

・中納言の朝臣、まめやかなる方は、いとよく仕うまつりぬべく侍るを、

(若菜上三〇〇二  
(一〇))

・猶又々よく気色見給へ。

(橋姫三三四  
(二))

源氏物語以外の作品の例として、

・童ハさるべき人に仰せ給ひて「よくいたはり物せよ」

(宇津保物語  
楼上下四八九 (五))

・「……道雅を猶よく言ひ教へ給へ」

(栄花物語  
卷第八・二九〇 (二五))

・このさぶらひぞ、よくきかむとあどうつめりし。

(大鏡・第一卷三  
八 (二四))

・としごろよくくらべつるひとぐなん、

(土佐日記  
二七 (六))

・屏風のたかきを、いとよく進退して、

(枕草子  
一二〇段・一七五 (二))

先に挙げた説明の三例は「よく十動作を示す語句」であるが、同類例の十例にみられるごとく、この意味に用いられる「よく」には「いと」を修飾語として用いられやすい。「十分に」にせよ、「余すところなく」にせよそれらが高度の程度を示す「大変・非常に」を修飾語として用いられる必要性はない。中古の程度副詞の「いと」は、「非常に・大変」と云ったモ

ノゴトの状態の程度が高度であることを示す外に、上代よりの意味として「全く」とも云える意味をもつ。前出例の「いとよく」の「いと」はその意味において「よく」を修飾し、「よく」の「余すところなくしつかりと」を全くその通りであるとしていると考えている。度外的極度を示すとされる「あまり」をも「いと」が修飾する例がみられるのも同様の意味としてであろう。

・まみのいとあまりわらかなるぞいとしも品高く見えざりける。

(野菜 一一五 (四))

・いとあまり物の榮なき御さまかなと見奉り給ふ。

(若菜上 三一五 (八))

・なさけなかるまじき人のいとあまり思ひ知らぬ人よりも

(手習 三七五 (七))

「いとよく」は、右のような意味において言わば「よく」を強めてのもので、程度としての極度の意味が変るものではない。

## (二)作用を示す語句を修飾する場合

・かんの君も、いとよくねびまさり、物々しきけさへ添ひて、見るかひあるさまし給へり。

(若菜上 三〇九 (十二))

正月の子の日に、玉鬘が二人の子供を連れて六條院の源氏に挨拶に来たところである。

「いとよく」は「ねびまさり」を修飾している。「ねびまさり」はおのずからのことで作用を示す。「いとよく」は「ねびまさり(美しく成長して)」と云った作用が「十分に」つまりは「余すところなくしかと」と云ったありようでその充実さの程度が極度において実現していることを示している。

・遂にこれを尋ね取りて、夜もあたり近く臥せ給ふ。明けたてば、猫のかしづきをして、撫で養ひ給ふ。人げ遠かりし心もいとよく馴れて、ともすれば衣の裾にまつはれ、寄り臥しむつるを、まめやかにうつくしと思ふ。

(若菜下 五 (九))

古代語の副詞「よく」の「十分に」とされる意味用法について

女三宮が飼っていた猫を譲りうけた春宮から、柏木が当分お借りすると言つて持ち帰り、自邸であやしているところである。

「いとよく」は「馴れて」を修飾している。「いとよく」は「馴れて」と云うおのずからの作用が「十分に」であること、つまりは「馴れる」と云う作用の実現が、「余すところなくしつかり」なされていると云う、その充実さの程度が極度であることにおいて実現していることを示している。

・いとよく肥えて、つぶつぶとをかしげなる胸をあけて、乳などくくめ給ふ。ちごもいとうつくしうおはする君なれば、白くをかしげなるに、御乳はいとかはらかなるを、心やりて慰め給ふ。

(横苗  
一八四(七))

夜泣きした若君を雲居雁が乳を飲ませてあやしているところである。

「いとよく」は「肥えて」を修飾している。「いとよく」は「肥えた」ようすが十分であること、つまりは「肥える」と云うおのずからなる作用の実現が、「余すところなくしつかり」なされているという、その充実さの程度が極度であることにおいて実現していることを示している。

以下の例も同類例である。

・若き人は、何心なく、いとよくまどろみたるべし。

(空蟬  
一〇〇(三))

・いとよくすき給ひぬべき心惑はさむと構へありき給ふなりけり。

(蟹  
四八(二三))

・御心ざまも、いとよく大人び給ひて、母女御も今少ししづやかに、おもりかなるところはまさり給へるを、うしろやすくは見奉らせ給へど、

(宿木  
二一九(二))

・「昔も、怪しう人に似ぬ有様にて、かやうの折は侍りしかど、おのづからいとよく怠るものを」と宣へば、  
(今はもう) 自然にすっかりしかと治ったものですからの意。

(宿木  
二四八(七))

・…と（薫が）宣へば、（浮舟は）いと恥かしくて、白き扇をまさぐりつつ添ひ臥したるかたはら目、いと隈なう白うて、なまめいたる額髪のひまなど、いとよく思ひいでられてあはれなり。

（東屋  
七六（二四））

源氏物語以外の作品の例として、

・一ノ宮いとよく御殿籠りたるに、

（宇津保物語国譲中  
二〇六（一三））

・…ば、いとよく笑はせ給ひて、

（宇津保物語楼上下  
五一八（三））

・几帳、屏風殊になければ、よくみゆ。

（落窪物語  
五六（七））

・いへにいたりて、かどにいるに、つきあかければ、いとよくありさまみゆ。

（土佐日記  
五八（三））

・大殿油も消ちたるに、長炭櫃の火に、もののあやめもよく見ゆ。

（枕草子二〇一段  
二四五（二三））

右の五例がみられる全用例である。

以上よりして、「よく」はしばしば「いとよく」として、動作・作用を示す語句を修飾して、その実現の充実さの程度が、余すところなくしつかりと云った意味において極度であることを示すのに用いられていると言える。

### （三）状態を示す語句を修飾する場合

「よく」が状態を示す語句を修飾している諸例の中で、際立って多いのは「似る」を修飾している場合である。

・「御手はいとをかしうのみなりまさるものかな」と独りごちて、うつくしとほほゑみ給ふ。常に書きかはし給へば、わが御手にいとよく似て、いますこしなまめかしう、女しき所書き添へ給へり。

（寶木  
四一五（二四））

二三日雲林院に籠り行いをしようとする源氏が早々に紫上を思い、消息を交しているところである。

「いとよく」は「似て」を修飾している。この文脈において、「わが御手に（紫上の手が）似て」の「似て」は、「似てい

古代語の副詞「よく」の「十分に」とされる意味用法について



て」と紫上の手蹟のありさま（状態）を意味している。「似るようになって」と云った作用を意味するものではない。「いとよく」は、その状態の程度が余すところなくしかと云った意味で極度であることを示している。「似て（いて）」なる状態は現実を目にする「ありさま」である。

・「いと清らにねびまさり給ひにけるかな。わらはに物し給へりしを見奉りそめし時、世に斯る光の出でおはしたる事と、おどろかれ侍りしを、時々見るだにゆゆしく覚え侍りてなむ。『内のうへなむいとよく似奉らせ給へる』と人々聞ゆるを、さりともし劣り給へらむとこそ推し量り侍れ」と、  
(二七 一 (三))

明石より帰京した源氏が女五の宮を訪ね挨拶を交しているところで、女五の宮の源氏への挨拶の一節である。

「いとよく」は「似奉らせ給へる」を修飾している。「似奉らせ給へる」は「似申し上げなさっている」の意で、「うつつにいる」と云う内のうへ（冷泉院）のようす（状態）を示している。「いとよく」は、「余すところなくしかと」の意味で「似奉らせ給へる」なる状態の程度が極度であることを示している。

次例も同類例である。

・「御けはひなどのなまめかしさは、いとよくおとどの君に似奉り給へり」と、人々もめで聞えけり。  
(五 一 (六))

・…と、いと忍びて言も続けず、つつましげに言ひ消ち給へる程、なほいとよく似給へるかな、と思ふにも、まづぞ悲しき。  
(二 三 七 (二))

・いかにぞ、故君にいとよく似給へらむ時に、嬉しからむかし、と思ひ寄らるるは、さすがに之もて離るまじき心なめりかし。  
(二 五 七 (三))

・尼君のいらへうちする声けはひの、ほのかなれど、宮の御方にも、いとよく似たりと聞ゆ。  
(三 二 六 (五))

「似る」は助詞「て」に続く以外は、助動詞「り」に続くのを一般としている。「うつつにいる」と状態を示している。

源氏物語以外の作品の例として

・「……。いとよく似奉り給へりけりな。…」

・上の御児生にぞ、いとよく似奉らせ給へる。

・「このわたりに見えし色紙にこそいとよく似たれ」と

「よく」が「似る」以外の状態の語句を修飾してその程度を「余すところなくしかと」と云った意味において極度であることを示すものに次のような用例がみられる。

・「よろづの冊子歌枕、よく案内知り見つくして、そのうちの言葉を取りいづるに、読みつぎたるすぢこそは、強うは変らざるべけれ。…」

年の暮れに、源氏が正月の衣装を関係する女性に贈った時に、末摘花のお礼の消息の筆跡・文字について紫上に語っているところである。

「よく」は「案内知り見つくして」を修飾している。「案内知り見つくす」は動作であるが、「くして」は「くしていて」の意で、「案内知り見つくし」た結果生じている。「精通している」とも言える状態を意味している。「よく」はその状態の程度が、「余すところなくしかと」の意味において、極度であることを意味している。

・「人柄は、宮の御人にて、いとよかるべし。今めかしう、いとなまめきたるさまして、さすがに賢く、あやまちすまじくなどして、あはひは目やすからむ。さて又宮仕にも、いとよく足らひたらむかし。…」など宜ふ気色の見まくほしければ、

玉鬘の宮仕えについて、源氏が夕霧と話しているところである。

「いとよく」は「足らひたら(り)」を修飾している。

古代語の副詞「よく」の「十分に」とされる意味用法について

(宇津保物語語国讀上)  
一九(六)

(栄花物語・卷第六・)  
二〇五(八)

(枕草子・一三八段)  
一九四(二〇)

(玉鬘)  
四〇四(九)

(藤袴)  
一六五(二)

「足られたら(り)」は、宮仕えについての玉鬘の資質について「充実している」と云った意味で、その状態を述べている。「いとよく」は、その状態の程度が「余すところなくしかと」と云った意味で、極度であることを示している。

・春秋よろづのものに通へる調べにて、通はしわたしつつ弾き給ふ。心しらひ教へ聞え給ふさまたがへず、いとよくわきまへ給へるを、いとうつくしくおもだたく思ひ聞え給ふ。

(若菜下  
四五二)

源氏が夕霧と音楽について語り合い、女御の君を始め居合わせた人々の合奏になったところで女三宮の演奏ぶりについて述べられているところである。

「いとよく」は「わきまへ給へる」を修飾している。「わきまへ給へる」は、「今そのことをわきまえるに至った」との意ではない。源氏に教えられたように気配り方をそのようすを間違えずに「わきまえてゐる」のである。女三宮の琴を弾くについての心構えのありよう(状態)である。「いとよく」は、その状態の程度が、「余すところなくしかと」と云った意味において極度であることを意味している。

次例も同類例である。

・「…。なにがしの教へもよくおぼし知るらむと思ひ給ふるを、…」

(藤裏葉  
二五一)  
(七)

・「…。さるはかしこき御教へならでも、いとよくをさめて侍る心を」

(夕霧  
二七九)  
(八)

・二十にもまだ僅かなる程なれど、いとよく整ひ過ぐして、かたちもさかりに匂ひていみじく清らなるを、

(若菜上  
二七九)  
(九)

・内記、あない、よく知れるかの殿の人に、問ひ聞きたりければ、

(浮舟  
九一)  
(七)

・心とどめて必ず弾き給ふべき五六のはちを、いと面白くすまして弾き給ふ。

(若菜下  
四四二)  
(四)

源氏物語以外の作品の用例として、

・「…。犬宮はいとよくはなれ奉り給ひてあらん」

(宇津保物語・国譲下  
二九四)  
(一五)

・としこをいとよく知れる人なりけるほどに、

(大和物語十三段・二三八(五))

・よく調じたる火桶の、灰の際きよげにて、おこしたる火に、内にかきたる絵などの見えたる、いとをかし。

(枕草子二〇一段・二四五(二))

・髪はいと長く、ひたいいとよくかくりて、色白くきたなげなくて、

(更級日記四八五(一三))

・「…」。いとよくかくれたるところつくり出でて聞えん」などたのもしうの給はせて、

(和泉式部日記四二五(十一))

ところで、「似る」によく似た意味を示すものとして「覚ゆ」がある。その「覚ゆ」が「くがく」に「覚ゆ」と用いられると、通釈書の類は「似ている」と現代語訳しがちである。

・「足立たず沈みそめ侍りけるのち、何事もあるかなきかになむ」とほのかに聞え給ふ声ぞ、昔人にいとよく覚えて若びたりけり。

(玉鬘三九七(九))

玉鬘を自邸に引取った源氏が、早々訪ね話し合っているところである。

「いとよく」は「覚え」を修飾している。その「覚ゆ」は「似る」でなく「思われる」と云う、おのずからの作用を意味していると思えてならない。

「似る」と「覚ゆ」の意味が異なるものだとする例に、次のようなものがある。

・似るとはなけれど、なほ母君のけはひにいとよく覚えて、これはかどめいたるところ添ひたる。

(胡蝶二八(四))

源氏に引き取られた玉鬘のようすを母の夕顔と比べて述べているところである。「似る」は容姿がであろうと思われる。容姿は似ているということはないけれど、やはり母君の気配に玉鬘の気配が思われてとのことである。「覚ゆ」は、あくまでもおのずからの心情作用を意味するものとして用いられているのであろう。従って、その「覚ゆ」を修飾する「よく」は

その作用の実現の充実さの程度が、「余すところなくしかと」の意味において、極度であることを示していると考える。

・なま目とまる心も添ひて見ればにや、眼居など、これは今すこし強うかどあるさままさりたれど、眦のとぢめをかしうかをれる気色など、いとよく覚え給へり。

(横苗 一八八(八))

女三宮の若君(薫)を見た夕霧の感想を述べているところである。

「いとよく」は「覚え給へり」を修飾している。「眦のとぢめをかしうかをれる気色などが、柏木のその気色に思われるの意である。「いとよく」は、「覚え給ふ」作用の実現の充実さの程度が、「余すところなくしかと」と云った意味で極度であることを示している。

・源中納言、兵部郷の宮、何事にも昔の人に劣るまじう、いと契り殊に物し給ふ人々にて、遊びの方は取り分きて心とどめ給へるを、手づかひすこしなよびたる搦音なむ、おとどには及び給はずと思ひ給ふるを、この御ことのねこそ、いとよく覚え給へれ。

(紅梅 三七三(六))

桜寮大納言が北方の真木柱の連れ子である宮の御方を見たいと思い、色々話しかけているところである。

「いとよく」は「覚え給へれ」を修飾している。「あなたの御琴の音こそ左大臣の夕霧の御琴の音に全くそっくりに思われる」と云った意である。「いとよく」は、「余すところなくしかと」と云った意味において、「宮の御方の御琴の音が左大臣夕霧のそれにおのずから思われると云う作用がその充実さの程度が極度において実現していることを示している。

次例も同類例である。

・「みこたちあまたあれど、そこをのみなむかか程よりあけくれ見し。されば思ひ渡さるるにやあらむ、いとよくこそ覚えたれ。ちひさきほどは、皆かくのみあるわざにやあらむ」とて、

(紅葉賀 二九〇(三))

「よく」の修飾をもたないが、次例は「ふと覚えて」と「覚え」が作用であることを明確に語っている。

・外を見出だして、すこしかたぶき給へるほど（紫上の様子は）、似るものなくうつくしげなり。かんざしおもやうの、恋聞ゆる人（藤壺）の面影にふと覚えてめでたければ、

（僅二九一（五））

#### （四）打消しを伴う語句を修飾する場合

以上はいずれも、「よく」が打消しを伴わぬ語句を修飾している場合であるが、「よく・よくしも・よくも」として打消しを伴う語句を修飾していると言える場合の諸例が若干みられる。

#### （i）動作を示す語句＋打消しの語を修飾していると言えるもの

・いかにして何れと知らむ、父おとどなど聞きて、事々しうもてなされむいかにぞや、まだ人の有様よく見さだめぬ程は、煩はしかるべし、

（花宴三一六（二））

宮中の南殿での花見の宴後、弘徽殿の細殿で会った姫君の素性が分からず、源氏が悩んでいるところである。

「よく」は「見定め（る）」を修飾し、その全体を「ぬ」が打消している。余すところなくしかと見定めることがないと云った意味である。「見定める」なる動作はその充実さの程度が相当度かそれ以下の程度で実現することを「よく」は「ぬ」との関係において示している。

同類例が「よくも」として一例みられる。

・姫君、御硯をやをら引寄せて、手習のやうに書きまぜ給ふを、「これに書き給へ。硯には書きつけざんなり」とて、紙奉り給へば、恥ぢらひて書き給ふ。

いかで斯く巢立ちけるぞと思ふにも

憂き水鳥の契をぞ知る

古代語の副詞「よく」の「十分に」とされる意味用法について

よからねど、その折はあはれなりけり。手はおひ先見えてまだよくも続け給はぬ程なり。

(橋姫六  
一四)

(ii) 作用を示す語句＋打消しの語を修飾していると云えるもの

・猫はまだよく人にもなつかぬにや、綱いと長く附きたりけるを、物に引掛けまつはれにけるを、逃げむとひこしろふ程に、御簾のそば、いとあらはに引きあげられたるを、とみに引きなほす人もなし。

(若菜上  
三八三(十二))

六條院を訪れた柏木が、たま／＼女三宮の飼っていた猫を目にするところである。

「よく」は「なつかぬ」を修飾している。

「よく」は、「なつく」と云う作用が「余すところなくしか」と云った意で、その実現の充実さの程度が極度においてなされることを示すもののそれが打消しの「ぬ」において打消されることから、結果として作用の実現がその充実さの程度が相当度以下の程度(この場合は低度)においてなされていることを示している。

同類例が「よくも」として一例みられる。

・菊の、まだよくもうつろひ果てで、わざと繕ひ立てさせ給へるは、なか／＼遅きに、

(宿木  
三〇一(七))

(iii) 状態を示す語句＋打消しの語を修飾していると云えるもの

・八月ばかりと契りて、調度をまうけ、はかなき遊び物をせさせても、さま殊にやうをかしう、蒔絵螺鈿のこまやかなる心ばへまさりて見ゆるものをば、この御方にと取隠して、劣りのを「これなむよき」とて見すれば、守はよくしも見知らず。

(東屋  
四(九))

浮舟の母が左近の少将と浮舟との結婚を決めてお祝いの調度を設けて、よい道具は浮舟の為に取り隠して夫には劣っているものを見せて「それがよい」と言っているところである。

「よくしも」は「見知らず」を修飾している。「見知らず」は「目が利く」と云ったその事に対するヒトのありようを意

味する。

「よくしも」は、夫の守が道具類の良し悪しの判別については「余すところなくしかと」と云ったふうに「目が利く」とがないことを意味している。「ず」と云う打消しの意味に係り結ばれていることで、「見知らず」なるありようの程度がそれ程でないという相当度以下であることを示している。

同様の類例が「よくも」として、二例みられる。

・まださやうなる人の有様など、よくも見知り給はねば、

(宿木 二二八 (五))

・まだよくも見馴れ給はぬに、をさなき人をとどめ奉り給はむもうしろめたかるべし。

(玉鬘 三五八 (十))

(iv) 「えよく (も) + 動作を示す語句 + 打消しの語」と云う形をとるもの

・「猶只この端書のいとほしげに侍るぞや」とて広げたれば、人の参るに苦しくて、御几帳引寄せて去りぬ。いとど胸つぶるるに、院入り給へば、えよくも隠し給はで、御しとねの下にさしはさみ給ひつ。

(若菜下 八七 (三))

柏木が女三宮への消息を寄こしたのを、人間に小侍従が女三宮に奉っていると折悪しく源氏が入って来るところである。

「よくも」は「え隠し給はで」を修飾している。「余すところなくしかと隠しなさることができないで」と云った意味である。「隠す」という動作を「余すところなくしかと」と女三宮はできないと云うことは、「余すところなくしかと」でない実現の充実さの程度でならできるのである。相当度以下の程度でなら動作を実現することが出来るのである。「えよくも」はそのような意味を示していることになる。

今一例、次例がみられる。

・大将は、この君をまだえよく見ぬかな、とおぼして、御簾のひまよりさし出で給へるに、花の枝の枯れて落ちたるを取

古代語の副詞「よく」の「十分に」とされる意味用法について



りて見せ奉りて、招き給へば、走りおはしたり。

(横苗 一八八(二))

「よく・よくしも・よくも」が打消しを含む動作・作用・状態を示す語句を修飾する時も、「よく」自体は「余すところなくしかと」と云った意味であることには変りはないことになる。

## おわりに

とりあげた「よく」は、「十分に」と現代語訳されるものであった。「十分に」との意味はそれらにあつて多くはよく適うものであるかに思う。その「十分に」を今少しだけ丁寧に言えば「余すところなくしつかりと」になつたまでである。

動作・作用の実現の程度を示す副詞にあつて、極度と量るものにその確かさの程度が極度であるとする「かならず」系に対して、今一つその充実さの程度が極度であるとする「よく」があることの確認はできたかに思う。

「余すところなくしつかりと」との意味は動作・作用のありようを具体的に示すもので、「かならず」のようにその意味そのものが実現の確かさの程度そのものを示すものではない。そのことが状態を示す語句を修飾してその程度を示すことになるのだから、まさに状態そのものを示す形容詞・形容動詞を修飾することはない。それらの例を全くみないのである。「余すところなくしつかりと」と云つた意味はそれらを修飾するにじまないようである。中古の程度副詞として和文脈の作品にもつともよく用いられている「いと」は形容詞・形容動詞の程度が高度であることを意味するのに全用例の七〇八割程が用いられる一方、次のような場合にも用いられるのである。

- ・ 人の寝ぬけはひしるくていと忍びたれど、  
(若紫 一八五(五))
- ・ 例のいとどけさ過ぎたる心からなるべし。  
(浮舟 八一(五))
- ・ をかしき童又いと馴れたる御隨身  
(野分 一九(二四))

・寄りてこわづくればいと物ふりたる声にて…（中略）…と問ふ。

・遣水の水草も掻きあらためていと心ゆきたる気色なり。

その「いと」も「似て・似たり・似たる」を修飾する例は中古にみられない。

「よく」の「余すところなくしつかりと」と云った意味は、「似ている」ありようを云わば検証的にその精度を極度と量る意味性において「似る（ている）」の修飾によくなじむものであったのであろう。

註（１）『日本文法通論』森重敏著

註（２）拙稿「古代語の程度副詞「いと」の二種の「程度」の意味とその諸相」女子大國文第八十七号

註（３）拙稿「中古の程度副詞について―いとの場合」國語國文第三十六卷第十号

（本学名誉教授）

（蓬生  
一六六（九）  
藤裏葉  
二六六（一四））

古代語の副詞「よく」の「十分に」とされる意味用法について